

# 資本の商品化ということについて

深 貝 善 太 郎

## 目 次

- I 生産物の商品への転化，商品の貨幣への転化，を前提すればそこに自生する利子つき資本と，平均利潤を生む資本関係を直接の前提として生れる利子つき資本
- II 利子つき資本が利子つき資本としてもつ本性または特質について
- III 資本の商品化ということと，利子つき資本の一般的特質と

- I 生産物の商品への転化，商品の貨幣への転化，を前提すればそこに自生する利子つき資本と，平均利潤を生む資本関係を直接の前提として生れる利子つき資本と

どのように発展した貨幣，信用関係も，さかのぼれば，生産物の商品への転化という岩盤につきあたる。生産物の商品への転化を出発点とし，商品の貨幣への転化，貨幣の資本への転化を前提しての，さらには，完成された形態での平均利潤を生む資本関係を直接の前提としての，近代的利子および利子つき資本である。近代的利子つき資本は，資本としての商品（または商品としての資本）として規定される。そして，そこで商品として現われるものは資本であるということから，この商品に特有の使用価値やこの商品に特有の流通様式，貸付という独自の譲渡様式や利子という独自の価格様式やは説明される。しかし，この利子つき資本が利子つき資本としてもつ本性または特質において，近代的利子つき資本と高利貸資

本とは区別されない。それでは、なぜ、これの本性や特質は、ここで商品として現われるものは資本であるということからでてくる、といわなければならないのか。なぜ、ここで商品として現われるものは貨幣であるということからでてくる、といっていけないのか。資本主義的生産様式の内的編成の対象化された、資本主義的生産様式の本質的な一要素をなす限りでの利子つき資本が、ここでの問題であるからである。

さて、近代的利子つき資本は、その理論の展開にあたって何よりもまず、「商品（独自の種類の商品＝利子つき資本）化された資本（平均利潤を生む資本）」として、とらえられる。そして、商品化された資本としての近代的利子つき資本規定につづいての、この商品に独自の使用価値や、独自の運動様式や価値、価格やに関する叙述である。すなわち、『資本論』第三巻第五篇は、それ以前の叙述をうけついで、「展開をつづけるにあたって念頭におくべきは、こんごわれわれが一般的利潤率または平均利潤率を云々するばあいには、それはのちの意味で（たんに相異なる諸部面に投下された産業資本間の利潤率の均等化としてではなく、商業資本をも含めての利潤率の均等化として……引用者）云々するのであり、かくして平均率の完成姿態に関連してのみ云々するのだということである」（K. III, S. 350, ㊸ ㊸ 1～2 頁, ㊸ ㊸ (4) 421 頁, ㊸ ㊸ (3) 419 頁）とまえおきして、つぎの叙述で始っている。

「貨幣——というのは、ここでは、ある価値額の自立的表現を意味するのであって、事実上その価値額が貨幣として実存するか商品として実存するかを問わない——は資本制生産の基礎の上では資本に転化されるのであって、この転化により、ある与えられた価値から、みずからを増殖し増加する価値となる。それは利潤を生産する。……かようにして貨幣は、それが貨幣として有する使用価値のほか、一つの追加的使用価値、資本として機能するという使用価値をうけとる。……可能的資本としての、利潤を生産するための手段としての、この属性において、貨幣は商品——といっても独自の種類の商品——となるのである。または、おなじことに帰着するが、資本は資本として商品となるのである。」（K.

Ⅲ, SS, 350 - 1. ㊦ (10) 2 - 3 頁, ㊧ (4) 422 頁, ㊨ (3) 419 - 420 頁)

また、おなじく第五篇二十一章をくってみると、つぎのごとき叙述をみいだす。

「自分の貨幣を利子つき資本として増殖しようとする貨幣所有者は、これを第三者に譲渡し、流通に投じ、それを資本として商品にする。ただ自分自身にとっただけではなく他の人々にとっても資本として、である。それは、それを譲渡する者にとって資本であるだけでなく、はじめから資本として、剰余価値、利潤を創造するという使用価値をもつ価値として、第三者に引き渡されるのである。」

(K. Ⅲ, S. 355. ㊦ (10) 13 頁, ㊧ (4) 429 頁, ㊨ (3) 426 頁) そして、「この商品に特有な、すなわち商品としての資本に特有な、貸付という形態、これはなおまた、他の諸取引でも売りという形態に代って現われる形態であるが、それは、すでに、資本がここでは商品として現われるという規定から、または貨幣が資本として商品になるという規定から、出てくるのである。」(K. Ⅲ, S. 354. ㊦ (10) 9 頁, ㊧ (4) 426 頁, ㊨ (3) 424 頁) 「忘れてならぬことは、ここでは資本は資本として商品なのだということ、言い換えれば、ここで問題にしている商品は資本だということである。だから、ここで現われるすべての関係は、単なる商品の立場からすれば、または資本の立場からしても、資本がその再生産過程で商品資本として機能するかぎりでは、不合理であろう。売買でなくて貸借が行われるということが、ここでは、商品——資本——の独自の性質から出てくる相違である。また、ここで支払われるものが利子であって商品の価格ではないということも、そうである。」

(K. Ⅲ, S. 366. ㊦ (10) 34 頁, ㊧ (4) 442 頁, ㊨ (3) 439 - 440 頁) そしてまた、「根本前提は、まさに、貨幣が資本として機能すること、したがってまた資本自体として、潜在的な資本として、第三者に引き渡されることができるといことなのである」(K. Ⅲ, S. 367. ㊦ (10) 37 頁, ㊧ (4) 444 頁, ㊨ (3) 441 頁) と。

みられるように、資本制生産の基礎では、貨幣は、貨幣としてではなく、資本——平均利潤を生む資本——としての属性において独特な種類の商品となり、利子つき資本となるということのはあくが、近代的利子つき資本の理解の第一歩である。資本制生産の基礎では、貨幣は、資本としての追加的使用価値をうけ

とるのであって、それが可能的資本であるということは、「貨幣に与えられた社会的規定性」(Mw. 3. S. 467. ㊦(9)139頁, ㊦(9)539頁)であるからである。

先資本家的形態の利子つき資本, 高利貸資本が, 商品化された資本としての近代的利子つき資本を特徴づける。貨幣は, 利子つき資本として, 資本制生産社会を基盤とすることなしに, 先資本家的社会に, また資本家的社会にも「遅れた産業部門や近代的生産様式への移行に逆らう産業部門に」(K. III, S. 611. ㊦(10)530頁, ㊦(5)771頁, ㊦(4)752頁), 利子つき資本として実存し機能する。高利貸資本の実存は, せめて, 生産物の一部が商品に転化しており, そして商品取引とともに, 貨幣がその種々な機能において発展しているということのほかには, なにも必要としないのである。」(K. III, S. 607. ㊦(10)521頁, ㊦(5)766頁, ㊦(4)747頁)

それが商品化せる資本であり, それをめぐる取引は貨幣資本家と産業資本家との関係であるということが, 近代的利子つき資本を高利貸資本から区別する。

近代的利子つき資本関係は, 銀行関係に具現する。のちにみるように, 銀行関係は, 貨幣取引とこれを基礎とする貨幣貸付との総合においてある。しかし, 銀行は種々なる形態の信用を取扱う。しかし, 信用すなわち, 貨幣約束のうちに, 貨幣はある。例えば, 「売られた商品に対する債務証書そのもの」のうちに, すなわち「ただ買い手の貨幣約束のうちに, 貨幣は存在する (…… es nur im Geldversprechen des Kaufers existiert)」(K.I. SS. 150, 154. ㊦(1)388頁, 395頁, ㊦(1)178頁, 182頁, ㊦(1)176頁, 180頁)ように, 銀行関係, 例えば, 預金銀行にあっては, それが直接的な目預金であるか間接的な目預金であるか何れにせよ, 銀行の貨幣約束のうちに, 貨幣はある。銀行は, そこで貸付けられるものが現金であるか信用そのものであるか何れにせよ, 貨幣資本家として借手に相対する。そして, 資本制生産の基礎上ではそれが可能的に資本であるということは「貨幣に与えられた社会的規定性」であるがゆえに, 銀行が相対するものは機能資本家ばかりでないとしても, ここでは「全取引は……二種類の資本家の間で, すなわち貨幣資本家と, 産業資本家または商業資本家との間で行なわれる」(K. III, S. 366. ㊦(10)34頁, ㊦(4)442頁, ㊦(3)439頁)ものとして, 利子

および利子つき資本論、信用制度論またはこれの基礎理論、は展開される。近代的利子つき資本を先資本家的形態の利子つき資本から区別するものは、それが、貨幣資本家と産業資本家または商業資本家との関係であるということにある。

もっとも、高利貸資本においても、近代的利子つき資本におけると同様のことはいえる。「商人が貨幣を借りるのは、貨幣を用いて利潤をあげるためであり、それを資本として充用するため、すなわち資本として支出するためである。だから、近代的資本家に金貸業者が対立するのと全く同じように初期の諸形態のもとでも、商人に金貸業者が対立する。」(K.Ⅲ, S. 607. ㊦(10) 522頁, ㊦(5) 766頁, ㊦(4) 747頁)

先資本家的商業利潤は、流通過程で行なわれる不等価交換から生ずる「讓渡利潤 (Veräußerungsprofit, profit upon alienation)」(K.Ⅲ, S. 342. ㊦(9) 366頁, ㊦(4) 411頁, ㊦(3) 408頁)であり、そこでの資本は平均利潤を生む資本とは質的に異なる。しかし、新旧商業資本の区別関係を別とすれば、商人に高利貸資本が対立する場合、貨幣は資本として商品となっているということに、言葉のうえでの矛盾はいちおうない。

「商人がその商品交換を媒介する諸生産部面の社会的組織が、どんなものであろうとも、商人の財産はつねに貨幣財産として実存するのであり、彼の貨幣はつねに資本として機能する。その形態はつねに $G-W-G'$ である。貨幣、交換価値の自立的形態が出发点であり、交換価値の増殖が独立的目的である。……商人資本の特徴的運動としてのこの $G-W-G'$ が、商人資本を、使用価値の交換を究極目的とする生産者どうしのあいだの商品取引 $W-G-W$ から、区別する。」(K.Ⅲ, S. 338. ㊦(9) 359～360頁, ㊦(4) 407頁, ㊦(3) 404頁)

かくして新旧商業資本の区別関係を別とすれば、先資本家的商人に高利貸が対立する場合、近代的利子つき資本におけると同様のことがいえるのであって、そこでは貨幣はとにかく資本として商品となっている。しかし、かかる関係は高利貸資本を特徴つけない。新旧商業資本の区別関係のなかに、つぎのことが、すなわち貨幣の資本としての社会的関係は資本の大洪水以前に存在したとしても、貨

幣の資本としての社会的規定性は先資本家的社会に存しないということが、含まれているからである。

可能的資本としての属性が貨幣に与えられた社会的規定性となるのは、資本主義的生産の基礎の上ではじめてのことである。しかして、商人に金貸業者が相対する関係は、先資本家的形態の利子つき資本、高利貸資本を特徴つけるにいたらない。

資本としてのではなく、単なる貨幣としての、貨幣への需要が、先資本家的形態の利子つき資本を特徴づける。高利貸資本の特徴的存在形態は、「浪費をこととする貴人、おもに土地所有への貨幣貸付による高利」と、「自分自身の労働条件をもっている小生産者への貨幣貸付による高利」と、である。(K. III, S. 608. ㊦ (10) 523頁, ㊦ (5) 767頁, ㊦ (4) 748頁)

かくして、近代的利子つき資本と高利貸資本とを区別するものは、その「貸手に対応する借手の全くの変化せる姿容」(K. III, S. 614. ㊦ (10) 535頁, ㊦ (5) 774頁, ㊦ (4) 755頁)である。しかし、二つの利子つき資本は、それらが利子つき資本そのものとしてもつ本性または特性において、区別されない。

すなわち、高利貸資本は、「その双生の兄弟である商業資本とともに、資本の大洪水以前の形態に属する」(K. III, S. 607. ㊦ (10) 521頁, ㊦ (5) 766頁, ㊦ (4) 747頁)が、これら二つの前期的資本はその運動形態において、つぎの点で異なる。すなわち、「商業資本では、その両極、すなわち市場に投ぜられた貨幣と、市場から引きあげられる増殖された貨幣とは、少くとも買いと売りとによって、流通の運動によって、媒介されている。高利貸資本では、形態 $G-W-G'$ が、無媒介の両極 $G-G'$ に、より多くの貨幣と交換される貨幣に、貨幣の性質と矛盾しておりしたがって商品交換の立場からは説明することのできない形態に、短縮されている。」(K. I, S. 179. ㊦ (2) 40頁, ㊦ (1) 215-6頁, ㊦ (1) 213頁)

他方、資本の生産関係を前提する近代的利子つき資本においても、「ある期間を限っての貨幣の譲渡、貸付と、利子(剰余価値)を伴ってのその回収とが、利子つき資本としての利子つき資本に属する運動の全形態である。貸出された貨幣

の資本としての現実の運動は、貸手と借手とのあいだの取引のかなたに横たわる一操作である。これらの取引そのものでは、この媒介は消えていて、目に見えなくなっており、直接には含まれていない。」(K.Ⅲ, S. 361. ⑩ 23 - 4 頁, ④ (4) 435 頁, ⑤ (3) 433 頁)

利子つき資本が利子つき資本としてもつ本性または特質は、それが、単に、生産物の商品化、商品の貨幣化を前提すれば、そこに自生する先資本家的利子つき資本であるか、資本の生産関係を前提し、平均利潤を生む資本関係を直接の前提に生れる近代的利子つき資本であるか、にかかわりない。その貸手に対応する借手の姿容がどのように変わろうとも、それが独自の種類の商品であり、利子つき資本であることに、変りはない。

## Ⅱ 利子つき資本が利子つき資本としてもつ本性または特質について

さて、「商品(独特の種類の商品、利子つき資本)化せる資本(平均利潤を生む資本)」としてのそれはあくが、近代的利子つき資本の理解の第一歩であり、これに発しての、この商品の特異な使用価値や価値、価格やの解明である。この説明序列は逆転されてはならない。<sup>1)</sup>そこで問題とされているのは、近代的利子つき資本であり、資本の商品化ということがあっての、この商品をめぐる諸問題の考察であるからである。

そして、利子つき資本が利子つき資本としてもつ本性または特質において、先資本家的利子つき資本と近代的利子つき資本とは区別されない。それだけに、商品化せる資本としての近代的利子つき資本規定は大切である。

1) 飯田繁『利子つき資本——信用理論研究序説——』325 - 6 頁, 有斐閣, 昭和34年1月, 参照。

事実、商品化せる資本としての近代的利子つき資本規定につづく、これに特有の使用価値やこれに特有の流通様式、貸付という独自の譲渡様式や利子という独自の価格様式やに関する説明は、近代的利子つき資本そのものに特有の——これ

が大切なのだが——わずかばかりの説明様式を度外視すれば、旧形態の利子つき資本にも、そのままあてはまる。

貨幣——というのはここではある価値額の自立的表現をいみする——は、その非使用的所有者と非所有的使用者との社会的分裂を背景に、独特の種類の商品、利子つき資本となる。

そして、利子つき資本が利子つき資本としてもつ運動  $G - G'$  (「ある期間を限っての貨幣の譲渡、貸付、そして利子(剰余価値)をつけてのその回収、これが利子つき資本としての利子つき資本に帰属する運動の全形態である。」 [K. III, S. 361. ⑩(10) 23-4 頁, ④(4) 435 頁, ⑤(3) 433 頁]) において、二つの利子つき資本に異なるところはな

ら。そこに表現される社会関係は、直接には貸手と借手との社会関係でしかないのであって、利子つき資本運動は、独特の流通過程として、交換過程、または、現実の流通過程から、区別される。すなわち、「ある有用な労働様式の生産物が、他の有用な労働様式の生産物と入れ替わる」関係の、直接的表現形態であり、素材的富の生産と消費との社会的物質代謝の直接的媒介項である諸商品の形態変換または変態から、すなわち「労働生産物の物質代謝がそれによって行なわれる形態転換、 $W - G - W$ 」または  $W' - G' - W'$ 、または、「商品流通によって貨幣に直接与えられる運動形態」、 「貨幣の流通」から、(K. I, S. 119. 128 - 9. ⑩(1) 321 頁, 342 - 3 頁, ④(1) 138 頁, 151 頁, ⑤(1) 136 頁, 149 - 150 頁) 区別されるとともに、 $W - G$  または  $W' - G'$  過程に直接生れる信用から、区別される。

通例の商品変態と利子つき資本の変態との区別関係、通例の商品流通または貨幣流通と利子つき資本の流通との区別関係、現実の流通過程のなかでの信用と利子つき資本の信用との区別関係は、他の経済学的諸範疇におけると同じく、同一性からの差別性においてとらえられなければならない。

生産物の商品への転化、商品の貨幣への転化を基盤としての、または、さらには、貨幣の資本への転化を基盤としての、利子つき資本である。すなわち、単純な商品または貨幣であるか資本主義的な商品または貨幣であるか何れにせよ、商

品変態、商品または貨幣の流通、を背景にもつことなしに、または、さらには、そこに直接に生ずる信用を背景にもつことなしに、独特の種類の商品、利子つき資本はない。利子つき資本としての利子つき資本に帰属する全運動は、労働生産物の物質代謝を直接的に表現しない。その運動の全過程は、独特の流過程として、現実の流過程から区別される。しかし、これは、価値関係、交換関係の、展開関係、すなわち価値形態の展開の変化の関係において、とらえられなければならない。

商品流通の直接的形態  $W-G-W$  においては、商品と貨幣とは対極に相対し、相互に引かえに手放される。それゆえに、そこでは、結局のところ、価値は何ら移転しないことになる<sup>1)</sup>。しかし、 $W-G$  または  $W'-G'$  の過程に直接生れる信用、すなわち商業信用では、「商品の変態または商品の価値形態の展開は変化している。」(K. I, SS. 148-9. ④ (1) 385-6頁, ⑤ (1) 176-7頁, ⑥ (1) 174-5頁) しかし、そこでは、売手は、将来の貨幣、貨幣約束、と引換えに価値を保持する<sup>2)</sup>。利子つき資本では、価値形態の展開は、さらなる変化をうけている。しかし、貨幣資本家は将来の貨幣、利子を伴う貨幣約束、と引換えに価値を保持する<sup>3)</sup>。異なるところは、前の二つの価値形態の展開は、直接的に物質代謝を表現するのに、後のそれはそうではない、ということにある。

- 1), 2) 「普通の売りではなにが譲り渡されるのか? 売られる商品の価値ではない。なぜならば、この価値はただ形態を変えるだけだからである。」(K. III, S. 363. ④ (10) 28-9頁, ⑤ (4) 438頁, ⑥ (3) 436頁) 「どの売買行為でも、およそ交換過程が行なわれる限りでは、たしかに目的物は手放される。いつでも、売られる対象の所有は譲り渡される。しかし、価値は手放されない。売りでは商品は手放されるが、商品の価値は手放されず、この価値は、貨幣という形で、またはここでは貨幣に代わる別の形態でしかない債務証書または支払請求権という形で、返される。……再生産過程の全体をつうじて産業資本家は同じ価値を自分の手に保持しているのであって(剰余価値は別として)、ただその価値の形態が変わるだけである。」(K. III, SS. 357-8. ④ (10) 17頁, ⑤ (4) 431頁, ⑥ (3) 429頁)

- 3) 「貨幣資本家は、じっさい、ある使用価値を譲り渡すのであって、そうすることによって、彼が手放すものは商品として手放されるのである。そしてその限りでは、

商品としての商品との類似は完全である。……違うのは、貸付の場合にはただ貨幣資本家のほうだけがこの取引で価値を手放すということである。といっても、彼は将来の返済によってこの価値を保持するのであるが。」(K. III, S. 364. ㊦(10) 30頁, ㊦(4) 439頁, ㊦(3) 437頁)

利子つき資本においては、価値形態の展開は変化をうけている。しかし、再生産にとってより直接的な信用において、すでに価値形態の展開は変化をうけている。しかし、 $W-G$ または $W'-G'$ 過程に直接に生れる信用は、社会的物質代謝の直接的表現形態であり、労働生産物の社会的物質代謝の直接的媒介項としてとらえられなければならない。支払約束と引かえに、商品は流通を離脱しているのであり、支払手段が現実<sup>に</sup>流通に入ってくるのは、「商品がすでに流通から出ていってからのこと」であり、その運動は、すでにそれ以前にできあがっている社会的な連関を表わしている」のである。(K. I, S. 150-1. ㊦(1) 388, 390頁, ㊦(1) 178-9頁, ㊦(1) 176-178頁) そして、資本制生産様式の発達とともに、現実の流通過程に直接に生れる信用により、「再生産過程のいろいろな段階が、……媒介される。」(K. III, S. 498-9. ㊦(10) 292-3頁, ㊦(5) 616頁, ㊦(4) 603-4頁)

そして、 $W-G$ または $W'-G'$ 、またはそこでの信用を、(商品流通にかかわりなく生ずる債権者または債務者の役割を別とすれば) 基盤にもっての利子つき資本ではある。そして、のちにみるように、それ自体として考察された商業信用の限界に、本来の貨幣信用は現われるということに、資本主義的信用は特徴づけられる。

さて、利子つき資本としての利子つき資本の運動は、 $W-G-W$ または $W'-G'-W'$ (または、 $G-W-G'$ を、……しかし資本の現実の流通過程は $W'-G'-W'$ となる)を、またはそこに直接に生れる信用を、背景にもち乍らも、これから切り離されて、そこでの価値形態の展開は、さらなる変化をうけている。そして、これは、すぐにさらなる価値形態の展開の変化につながる。

そこで価値の形態転化として現われるもの、貨幣(資本元本)の、貨幣(資本

元本プラス利子) 請求権への転化と、貨幣請求権の、貨幣への再転化とは、いわば、支払約束<sup>1)</sup>の、いわゆる金融資産の、購入と販売との関係である。それは、利子つき資本の投下対象としての擬制資本、例えば割引手形や利子つき証券などへの資本の前貸と還流との関係に発展し、かかる形態にまで発展すれば、そこでは貸付の形態すら消え、行われるものは売買として現われる。しかし、それが、独特の流通過程での独特の譲渡様式、貸付自身の、別の表現形態であることは明らかである。行なわれるものは売買として現われるとしても、またそこでのさらなる貸付取引、信用取引なるものが現われるとしても、それは、現実の過程での売買取引や信用取引とは違って、素材的富の物質代謝関係を直接に表現しない。

- 1) 「資金需要者の支払約束と引換えに資金を提供する。つまり資金需要者の支払約束を買う……。」(山田良治, 田村茂, 田村申一, 花輪俊哉, 『金融入門』有斐閣, 1980年12月52頁)「金融資産……。この語を用いて資金の供給を表現すれば、それは金融資産を購入すること……。」(同前, 同頁)

しかし、いまは、利子つき貨幣資本の投下対象としての擬制資本運動ではなく、これに先行し、これを媒介する、利子つき資本として投下さるべく豫定された貨幣資本、またはかかるものとしての、いわゆる金融資産貨幣の、利子つき資本としての運動、そこでの価値形態の展開における変化(これのさらなる変化として、利子つき資本の投下対象としての、擬制資本、擬制的商品、運動はある)が、問題である。

さて、利子つき資本においては、貨幣資本家は、将来の返済によって、価値を保持する。すなわち、その全過程をつうじて貨幣資本家は、同じ価値を、貨幣または貨幣請求権の形態で自分の手で保持しているのであって(利子は別として)、ただその価値の形態が変わるだけである。それは、「再生産過程の全体をつうじて産業資本家は同じ価値を自分の手で保持しているのであって(剰余価値は別として)、ただその価値の形態が変わるだけである」(K. III, SS. 357-8, ⑩10178頁, ⑩4)431頁, ⑩(3)429頁) 関係に、類以する。そして、類以とともに差異も明らかである。社会的物質代謝の直接的表現であるかないかが、商品または

貨幣流通と利子つき資本の流通とを区別する。

そして、利子つき資本そのものの本性または特質において、近代的利子つき資本と高利貸資本とは区別されない。

利子つき資本が利子つき資本としてもつ独自の流通様式や価値価格様式やの根拠について、新旧二つの利子つき資本にあてはまるように表現すれば、「それは、すでに、(貨幣が、または——引用者)資本がここでは商品として現われるという規定から、または貨幣が(貨幣として、または——引用者)資本として商品になるという規定から、出てくるのである」(K. III. S. 354. ⑩(10)9頁, ④(4)426頁, ⑥(3)424頁), ということになろう。また、「忘れてならないのは、ここでは(貨幣は貨幣として、または——引用者)資本は資本として商品なのだということ、言い換えれば、ここで問題にしている商品は(貨幣または——引用者)資本だということである。それゆえ、ここで現われるすべての関係は、単なる商品の立場から見れば、または資本の立場から見ても、資本がその再生産過程で商品資本として機能する限りでは、不合理であろう。貸借であって売買ではないということが、ここでは、商品——(貨幣または——引用者)資本——の独自の性質から出てくる相違である。またここで支払われるものが利子であって商品の価格ではないということも、そうである。」(K. III. S. 366. ⑩(10)34頁, ④(4)442頁, ⑥(3)440頁,)ということになろう。

しかし、利子つき資本そのものの特性に目を奪われて、その独自の譲渡様式や価値、価格様式やを強調し、それは商品交換の立場からは説明しえない独自なものだと繰り返すとどまるならば、それは「ただ、表面の塵雲だけをみて、この塵埃を潜越にも何か神秘的なものだ、重大なものだ、と吹聴するだけのこと」(K. III, S. 369. ⑩(10)41頁, ④(4)446頁, ⑥(3)444頁)にしかならない。問題は、かかるものとしての、しかし、単にかかるものとしてのではなく、資本関係の物化形態としての、利子つき資本のはあく——価値形態の展開の変化のなかでの——にある。

### Ⅲ 資本の商品化ということと利子つき資本の一般的性格と

さて、利子つき資本はいかにして利子つき資本でありうるのか。およそあるものが取引の対象物となり、一つの商品となりうるのは、それがその需要者たる他人にとっての使用価値であるがためにはかならない。そして、ものの売手がそれに認める使用価値は、それが交換価値の担い手であり、それがある価格で販売され<sup>1)</sup>うということにある。しかし、通例の商品におけるがごとくに、独特の種類の商品、利子つき資本においても、使用価値規定は分離されなければならない。この商品の所有者にとっての使用価値と、他人にとっての使用価値とに。しかし、かくして抽出された、この商品の、他人にとっての使用価値規定が、独特の種類の商品としての利子つき資本の理解のための起点となる。

- 1) 「彼の商品は、彼にとっては直接的使用価値をもっていない。もしそれをもっているなら、彼はその商品を市場にもっていかないであろう。彼の商品は、他人にとって使用価値をもっている。彼にとっては、それは、直接にはただ、交換価値の担い手でありしたがって交換手段であるという使用価値をもっているだけである。それだからこそ、彼はその商品を、自分を満足させる使用価値をもつ商品とひきかえに、手放そうとするのである。すべての商品は、その所持者にとっては非使用価値であり、その非所持者にとっては使用価値である。」(K. I, S. 100. ①(1) 281 頁, ②(1) 114 ~ 5 頁, ③(1) 112 頁)

さて、貨幣は、資本の生産関係のもとでは、貨幣としての使用価値のほかに、資本としての追加的使用価値をうけとる。しかし、貨幣は、資本としての追加的使用価値を捨象しても、貨幣としての、購買または支払のための——ことに支払のための——手段としての、機能関係において、非所有者にとっての使用価値として、貸付取引の対象となり、利子つき資本となる。そして貨幣は、利子つき資本となることによって、富の蓄積のための手段としての使用価値をより充分に発揮するにいたる——高利貸資本——<sup>1)</sup>。

- 1) 「……特に支払手段としての貨幣の機能こそは、利子を、したがってまた貨幣資本を発展させるものである。浪費をこととし退廃をひき起こす富が欲するものは、

貨幣としての貨幣，なんでも買える手段としての貨幣である。（また債務支払のためにも。）小生産者が貨幣を必要とするのは，なによりもまず支払のためである。（領主や国家への夫役や現物納付が貨幣地代や貨幣租税に転化することはこの点で大きな役割を演ずる。）どちらの場合にも貨幣は貨幣として必要とされるのである。他方，貨幣蓄蔵は高利においてはじめて現実的となり，その夢を実現する。」（K. III, SS. 611 - 2, ㊶(10) 531 頁, ㊷(5) 772 頁, ㊸(4) 753 頁）

「支払手段としての貨幣の機能は，高利の本来の大きな特な地盤である。一定の期限のある貨幣納付，すなわち借地料や年具や租税などはみな貨幣支払の必要を伴っている。……それだから，概して高利は，古代ローマから近代に至るまで，徴税請負人〔*fermiers généraux*, *receveurs généraux*〕につきものなのである。次いで，商業の発展や商品生産の一般化につれて，購買と支払との時間的分離が発展する。貨幣は一定の期限に引き渡されればよい。そのために今日でもまだ貨幣資本家と高利貸との区別がはっきりしないような状態になることがあるということは，近代の貨幣恐慌によって証明されている。しかし，この同じ高利は，支払手段としての貨幣の必要をいっそう発達させる主要手段になる……ここでは高利は支払手段としての貨幣から成長して，貨幣のこの機能すなわち自分の最も固有な地盤を拡張するのである。」（K. III, S. 613. ㊶(10) 533 - 4 頁, ㊷(5) 773 - 4 頁, ㊸(4) 754 - 5 頁）

しかし，いかに貨幣は資本よりも一そう包括的な概念であるとはいえ，利子つき資本の，他人にとっての使用価値規定としては，これでは前期的利子つき資本についての規定にしかならない。

近代的利子つき資本について考えるにあたって，貨幣がうけとる資本としての追加的使用価値を捨象するわけにいかない。勿論，貨幣は資本よりも一そう包括的な概念であり，かつ，資本の一般形態である。そして，今日でも，というよりも今日では，支払手段としての，しかし，商品流通部面にかかわりなくではなく，商品流通部面に自生する，支払手段としての貨幣に，利子つき資本の本来的な，独自の地盤はある。のちにみるように，近代的利子つき資本関係がそこに具現される信用制度，銀行制度は，まさに，支払手段としての貨幣の機能の発展関係においてある。しかし，みおとしてならないことは，そこでは，貨幣（しかし具体的には信用——しかし，信用，すなわち貨幣約束の中に，貨幣はあるのだから，基礎的考察にあたっては，信用はという代りに貨幣はといえばよい——）は，そ

れがうけとる利子つき資本としての形態を捨象しても、平均利潤を生む資本として、すでに潜勢的に資本であるということである。そして、そこでは、支払手段は、貨幣の、したがって資本の、機能的存在形態である。

さて、商品は流通を離脱すれば、商品であることをやめる。そのことによって、生産物は使用価値実現の過程に入る。同じように、商品化された資本、利子つき資本の場合、独特の流過程を離脱すれば、それは、商品であることをやめる。そのことによって、資本は、他人にとっての使用価値実現の過程に入る。独特の流過程を捨象すれば、のこるものは生産過程自身の他者としての現実の流過程であること、単純な商品または貨幣の生産関係であるか、資本主義的な商品または貨幣の生産関係であるかに、かわりない。しかし、資本の生産関係のもとでも、資本は現実の流過程では単純に商品または貨幣として現われる——「流過程は商品の変態に分解する」（K. III, SS. 356—7. ⑩(10) 15頁, ⑤(4) 430頁, ⑥(3) 428頁）——としても、生産過程自身、といっても、他ならぬ資本の生産過程自身の他者としての、資本の現実の流過程、販売と購買との両過程のはあくが大切である。

さて、資本の生産過程は、単に直接的生産過程の繰り返しとして存するのではなく、資本の流過程の繰り返しを含んでいる。そして、大切なことは、資本としての使用価値の実現は、そのような資本の生産過程そのものなかでのことであるとしても、資本の生産関係を前提すれば、貨幣は過程に入る前にすでに潜勢的に資本である、ということである。なぜなら、貨幣は、生産諸要素に転形されるのであって、「それが貨幣として行なうこの行為は資本主義的生産過程を準備する」（K. III, S. 354. ⑩(10) 11頁, ⑤(4) 427頁, ⑥(3) 425頁）からである。かくして、「すでに生産過程より前に、——ひとたび資本主義的生産様式が与えられており、その基礎上で、またそれに対応する社会的諸関係のなかで労働が行なわれており、したがってまず資本の形成過程が問題とされるのでない場合には——それは資本それ自体として、その性格からみて資本として、存在するのである。といっても、この性格は過程のなかではじめて実現されるのであり、一般

にその現実性をただ過程そのものなかだけでもっているのではあるが。」(Mw. 3, S. 466. ㊦(9) 138頁, ㊦(11) 538頁) かくしてまた, 「貨幣が貨幣として支出されるか, それとも資本として前貸されるかは, 資本制生産の基礎の上では, ただ貨幣の使い方の相違でしかない。」(K. III, SS. 367-8. ㊦(10) 37-8頁, ㊦(4) 444頁, ㊦(3) 442頁)

さて, 利子つき資本が利子つき資本としてもつ属性において近代的利子つき資本と高利貸資本とは異なるところはない。しかし, それゆえに商品化した資本としての近代的利子つき資本規定は, 一そう重要である。しかし, 利子つき資本に現われる社会関係は, 直接には, 利潤——平均利潤——配分関係, 所有資本家と機能資本家との関係, にすぎない。しかして, 平均利潤なる概念自体が, 高度の物神形態であるのだから, これに対象化された「資本主義生産様式の内的編制」(K. III, S. 623, ㊦(10) 553頁, ㊦(5) 786頁, ㊦(4) 766頁) を見ないで, ひとがもし, とにかく利潤の一部であり一部にすぎないものとしての利子の理解にとどまるならば, 「利潤をうる目的で貨幣を借りたものが利子を支払うことの自然的(「社会的」ではなく)公正を云々する背理」(K. III, SS. 351-2, ㊦(10) 4~5頁, ㊦(4) 423~4頁, ㊦(3) 421頁) におちいるであろう。平均利潤の成立は, 近代的利子および利子つき資本論展開のための直接的前提であり, 直接的前提であるにすぎないことに, 注意されなければならない。

- 1) 「すでに外化された, まだ誕生の臍帯を示している最初の単純な姿とは違った, そして一見しただけではもはやけって判別できない, 剰余価値の形態, その利潤としての定在にこそ, 利子はもとづいているのである。」(Mw. 3, S. 415. ㊦(9) 114頁, ㊦(5) 22頁)

さて, 利子つき資本は資本制生産に先だって高利貸資本という形態で実存した。そして高利貸資本の実存条件はただ商品および貨幣流通だけであり, 利子つき資本が利子つき資本としてもつ性質または性格において, 近代的利子つき資本と高利貸資本とは異なるところはない。ひとがもしたんに利子つき資本が利子つき資本としてもつ独自の性質や性格について云々しようとするならば(もちろんそれ

だけでは無駄なことではあるが)、まずそれを商品化した〈資本〉としてとらえ、その独自の運動、貸付という独自の譲渡様式や利子という独自の価様式や、は、「〈資本〉がここでは商品となるという規定から生じる」(K. III, S. 354. S. 366. ㊸⑩9頁, 34頁, ㊸④426頁, 442頁, ㊸③424頁, 439頁)といわないで、利子つき資本をまず商品化した〈貨幣〉としてとらえ、その独自の運動は「〈貨幣〉がここでは〈商品〉となるという規定から生じる」、といえは足りるであろう。貨幣はそれが利子をうるために貸付けられるばあいには、いかなるばあいにも、通例の商品や貨幣とは異なる独自の種類の商品であり利子つき資本であることに相違はない。そして「貨幣」は「資本」よりも一そう包括的な概念であり、また貨幣は資本の一般的形態でもあるがゆえに、そして、現実の流通過程では資本の運動は一連の売買に分解するがゆえに、ただ利子つき資本が利子つき資本としてもつ独自の性質や性格をえがきだすためには、かかる独自の「商品」の一表象をわれわれの頭のなかにかうかべて、それをまず「商品化した〈資本〉」としてではなく、「商品化した〈貨幣〉」としてとらえ、しかるのちにこの「商品」を、通例の商品や貨幣やと、比較すればたりのであろうし、また、その方がわかりやすいであろう。(じつは前節ではわざとこのように試みられた。)しかし、「貨幣」は「資本」の一般的形態ではあるが、「貨幣」は「資本」よりも一そう包括的な概念であるという、そして、現実の流通過程では資本は一連の売買に分解するという同じ理由から、これでは資本主義的生産様式を特徴づける利子つき資本規定にならない。とにかく生産物の商品への転化、商品の貨幣への転化を基礎とするということ、および、とにかく独自の種類の商品であるということにおいて、高利貸資本と近代的利子つき資本とは異なるところがない。しかし、おなじく商品生産社会といっても高利貸資本と近代的利子つき資本とでは、それに対象化されている社会関係は、異なる。しかも、先資本家的社会においては経済的神秘化するものは「ただおもに貨幣と利子つき資本とに関連してはいつてくるだけである」(K. III, S. 839. ㊸⑪426-7頁, ㊸⑤1064頁, ㊸④1038頁, 参照)のにたいし、資本家的生産社会においてはそうではない。平均利潤およ

び平均利潤を生む資本じたいがすでに高度な物神形態である。これの、またはこれに内含される資本関係、資本主義的生産様式の内的編成の、所有としての資本、<sup>1)</sup> 利子つき資本への、形態化がここでの問題である。

- 1) 「素材的富の対立的な社会的規定性——それが賃労働としての労働に対立するということ——は、生産過程から引離されても、すでに資本所有そのものに表わされている。この一契機、それは資本主義的生産過程の恒常的な結果であり、またこの過程の恒常的な結果としてこの過程の恒常的な前提なのであるが、この契機は、資本主義的生産過程そのものからは引き離されても、次のことに表わされているのである。すなわち、貨幣は、また同様に商品も、それ自体で、潜在的に、潜勢的に、資本であるということ、貨幣も商品も資本として売られることができるということに。」(K. III, S. 368. ㊦ (10) 38頁, ㊦ (4) 444—5頁, ㊦ (3) 442頁)

だからして、たとえば、「売買ではなくて貸借が行なわれるということは、この場合には、商品——資本——の独自性から生ずる区別である。この場合に支払われるものが利子であって商品の価格でないということも同様である」(K. III, S. 366. ㊦ (10) 34頁, ㊦ (4) 442頁, ㊦ (3) 440頁……傍点は引用者)という場合の資本や、「価値としての価値(利子)が資本の使用価値となる、という主要混乱」(K. III, S. 367. ㊦ (10) 36頁, ㊦ (4) 443頁, ㊦ (3) 441頁, ……傍点は引用者)という場合の資本は、〔貨幣〕ではなく〔資本〕なのである。しかしまた、ただたんにその独自の商品としての性格を叙述するだけのことならば、「商品化した資本」としてその規定にかえて、「商品化した貨幣」としての規定をもってしても、その叙述はいちおうは可能でありうる(といっても、ただその通例の商品や貨幣とは異なる独自の商品性を叙述するかぎりでは、というだけのことであってそのような規定のしかたでは資本関係の最高度の物神形態としてのそのはあくはおよそ不可能なことであり、したがってまたそのような試みはそれじたいとしてはおよそ無駄なことであり、したがってすでに繰返し指摘されたように、商品化した資本としてのそのはあくこそ、その叙述の出発点でなければならぬのであるが)ということとは、とりもなおさずその最高度の物神性を裏書するものにほかならないといえよう。